

## 小規模な地域の魅力発信における NPO の役割について

実査日：平成 25 年 10 月 12 日

報告者：財団法人都市化研究公室研究員岩間真二

### 1. はじめに

地域問題の解決や中心市街地活性化を行うに当たり、インフラ整備とは別に、地域におけるイベントを行うことがある。これらについて様々な地域で多種のイベントが行われ、こういったイベントをドライブとして地域の活性化に資するようにはしていこうという目的がある。

このようなイベントでは単にお祭りの一過性に陥ってしまっているのも散見される。本来、継続性や、地域への還流、平時への波及などが期待されているが、その点において。

そういった中で今回、別府にてオンパクというイベントを開催し、その手法をオンパク手法として全国へオンパク広めていこうとしている、NPO 法人ハットウ・オンパク理事の野上氏にヒアリングを行った。

### 2. オンパク

#### ● 概要

オンパクは「別府八湯温泉博覧会」の略称で NPO 法人ハットウ・オンパクが別府にて 2001 年（平成 13 年）に始めたイベントである。

エリアで行っていくイベントで主に体験型の小規模イベントを多くおよそ 1 か月弱の期間行っていくものであり、近年ではおよそ 100 種のイベントが行われているとの事である。

地域資源の発掘や情報発信、地域に住む人が自発的に行っていくことによる、地域人材の育成や観光サービスの創出を目的として行われているものとなっている。

イベントはまちあるきプログラム、農業などの自然体験、秘湯への探検ツアー、歴史的建物や空間でのイベント、地域の文化体験（芸者遊び体験など）多種のイベントが同時期に行われるものである。

#### ● オンパク

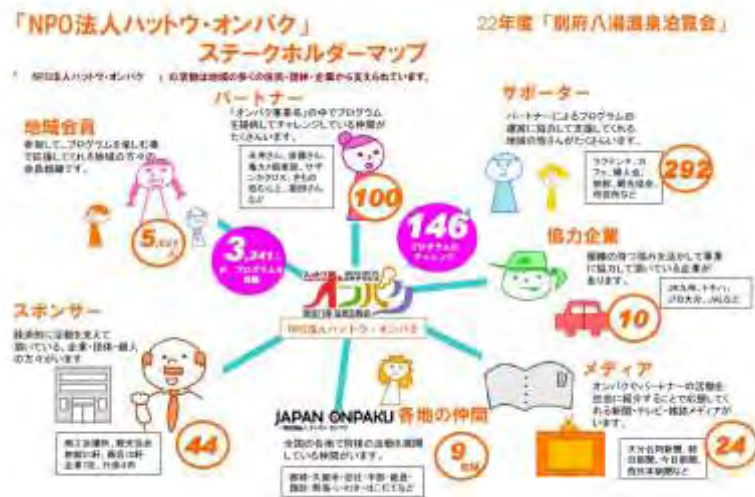
オンパクは、地域資源を発掘し、それに参加、体験する機会を提供し、個々の活動を束ねてイベントとしてのインパクトを上げ効果を増大させ、活動の中でそれぞれの活動が連携してくことを狙っている。

各イベントは多くて 20 名程度の参加と小規模で、それぞれの地域団体が身の丈

に合ったイベントを開催できるようになっている。

また参加者は自分たちの暮らしている地域の良さを知る機会を提供しているということである。

その別府における主体が前述の NPO 法人ハットウ・オンパクである。別府のオンパクにおける各主体の関係は以下の通り。



HP より

以上のように多くの人を巻き込んでいくことにより通常のイベント以上の効果を出していこうとするものとなっている。

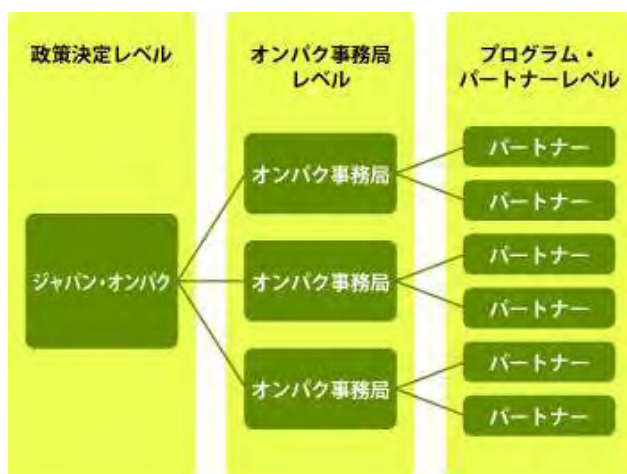
- オンパク手法の他地域への展開

別府においては 2001 年の第 1 回より年 1-2 回のオンパクが開催されてきた。2004 年度に経済産業省 サービス産業創出支援モデル事業の補助金を受けたことにより事業のモデル化パッケージ化によりノウハウの移転を進め他地域にも広めていくことを始める。

2004 年から 2005 年にかけて調査等を進め、2006 年に函館でオンパク手法を使った事業を成功させている。その後、地域に移転するための人材育成を行うプログラムの開発を行っている。

その後能登、諏訪など多くの地域で開催されるにあたり、2010 年にオンパク手法を広めるための全国組織である「ジャパン・オンパク」を設立し 2011 年に社団法人化している。

その仕組みとして、ジャパン・オンパクは各地のオンパクイベントにて実際に活動を行うパートナーと言われる団体に対し各地のオンパク事務局が支援し、その事務局をジャパン・オンパクが支援していく形をとっている。



HP より

ジャパン・オンパクではオンパク手法を導入したい地域に対し、支援を行うことを大きな目的としている。そのため、研修会の開催・視察の受け入れによる現場体験、訪問支援として企画・運営などの支援、ウェブ作成の支援などを行っている。



支援メニュー (HP より)

オンパク手法の特徴としては、プログラムの中に事業評価を行う仕組みを伴っていることである。その尺度については以下の3点を評価している

- ・ 地域コミュニティの変化 多彩な地域資源を発掘、紹介（発信）、体験を通じて、地域住民等に地域の価値を再認識してもらい変化を促す。
- ・ 地域の団体や事業者の育成 プログラムへの参加・チャレンジを通じて地域の団体や事業者に変化を促し、事業を成長させる。
- ・ 自立した中間支援組織の育成 地域において広範なネットワークを持つ中間支援組織を育成して問題解決の基盤とする。

ジャパン・オンパク、オンパク事業の評価手法(簡易モデル)についてより

評価方法としては、パートナー数や、プログラム数や参加者数などの定量的評価、活動資金の状況や情報発信や、組織運営の状況などをヒアリングによる定性的評価を合わせて行い、オンパク型中間支援組織の成長段階を 3 段階で評価している。

フェーズ・状態	評価基準
フェーズ1 オンパク・イベントを開始してなく、不十分な状態	大部分がC
フェーズ2 オンパク型中間支援組織として成長途上であるが、継続的に事業を行える状態	大部分がB
フェーズ3 オンパク型中間支援組織として継続的かつ効果的に事業を行う事が可能な状態	大部分がA

(ジャパン・オンパク HP より)

### 3. おわりに

本事例では、イベントで何をするかということは勿論であるが、そのイベントを拡大および継続的に行い、地域を元気になると同時に継続すること、より多くの人を巻き込んでいくことによって、地域の人材資源の発掘を行っていくことや、地域の人が自分の地域を見直していき、それが連鎖して活動が広がっていくことにある。

そのための仕組みが多くの人に関わっていく小規模体験型イベントを多数行っていくことであり、継続性という面で行けば、どれくらいの人を巻き込んだのか、情報発信の状況や、財政的な面を含めた事後評価をパッケージ化したことにあると思われる。

事前の研修や、開催支援を行うことは勿論、事後評価まで行うことで、オンパクを開催した地域がオンパクを開催したことで何が起きたのかを客観的に把握し、継続性を高めていくことや、より地域が元気になるための方策を考えていくうえで単に一過性のイベントでは終わらないための仕組みであると思われる。

別府でのオンパクの開催ノウハウをパッケージ化しオンパク手法として広め、事後評価によって、地域への波及効果について見える化の一つのモデルを示したことで、地域課題改善のモデルケースとして表層的なイベント開催と異なる意義があると思われる。